

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第14話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチェリールタ：騎士団長

クレーデュー：ルチェリールタの妹

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノ皇女

シャーニューニダ：ムジート族

ニユンリン：混血魔族

嵐宮芽里：夕杜王女

浮世心愛：雷龍

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

ワウー：犬

フィール：アルデスナ王子

ゲドーナ：ゲドン族首領

エンリコ：カルナコマリ王子

ナキサン（35）：カルナコマリ女王

ナギスデュー（44）：カルナコマリ

国王

仮面の殺人鬼：？

男
A

門
番
A

院長：
病院の
院長

○ 船・個室（夜）

ルチェリールタ、チビィ、シャーザベ
スラ、シャーニューニダ、ニユンリン、
嵐宮芽里、浮世心愛、アルノ・ヨナ、
ワウー、フィルの一行が部屋にいる。

チビィ「あれ、結局ゼットシグマによる被害
はどうなったんだ？」

フィル「父さんによれば、国が総出で被害者
の救済にあたっているそうだから心配いら
ないだろう」

※ ※ ※

（フラッシュ）

会話するフィルとリチャクラオン。

※ ※ ※

芽里「これ以上悪化することはないでしょう
が、邪悪なエネルギーは十中八九レドニク
スに集まっているでしょうね。ですがゼラ
ムが何か仕込んだと思われる色々なものが、
ポストゼランガロニアの機械以外にもあり
そうで危険です。これら問題は解決してお

らず、なんとかするには奴らを倒すしかないでしょう」

チビィ「あの情報屋も倒さないとな」

シャーニューニダ「はあ」

シャーニューニダ、息を吐き出す。

シャーニューニダ「我はそろそろこの旅から
離脱したほうがいいかもな」

ルチェリールタ「え、何急に」

一同、シャーニューニダに視線を集める。

シャーニューニダ「我がいると妨げになる。

特にニュンリン。我と旅を続ける気か？

ニュンリンに限らないが、我が皆を裏切らないか心配ではないのか？」

ニュンリン、悲しそうな顔をする。

ニュンリン「でも、仲間じゃん」

シャーニューニダ「ふっ。お前からそんな言

葉が聞けるとはな」

シャーニューニダ、少し笑う。

ニュンリン「だってあーし、仲間の温かさを

知ったもん！ そんな後で、出ていけなんて言えないよ！ シャーニューニダ、結構ぶっくらぼうでトゲあるけどほんとは優しいじゃん！」

○（回想）闘技場・待機室

シャーニューニダ「はつきり言って余裕だったな。ルチェリールタが勝てたならなおさらだ。これでニュンリンも、多少は不安が消えただろ。あいつは我らからしたらそこまで強くない」

ニュンリン「シャーニューニダ、まさか、あーしのために」

ニュンリン、シャーニューニダをじつと見つめる。

（回想終わり）

○船・個室

シャーニューニダ「だが、目的のためならルチェリールタを殺そうとしたぞ」

ニユンリン「今は違う！」

シャーニューニダ「そうか」

ルチェリールタ、悲しそうな顔でシャ

ーニューニダを見つめる。

ルチェリールタN「シャーニューニダの顔が、

どこか寂しそうに見えた」

ヨナ「そろそろ寝るのヨナ。あと、ルチェリールタ」

ヨナ、ルチェリールタを見る。

ヨナ「アレはフェイク画像だったってことで
権力でごり押しといたから、変な噂とかも
う流れないのヨナ」

ルチェリールタ「決闘の意味！」

ヨナ「ごり押しのほうは念のためで、いくら
王族でもできるかは賭けだったから、決闘
に勝つ意味はあるのヨナ」

芽里「私たちはもう寝ますので」

ルチェリールタとニユンリン以外、寝
る。

ニユンリン「ね、しょ？」

ニユンリン、笑顔でルチェリールタに抱きつく。

ルチェリールタとニユンリン、ベッドインする。

ニユンリン、男性器をルチェリールタに挿入する。

ルチェリールタ「あんっ！」

ニユンリン、腰を振る。

ニユンリン「ルチェリールタっ、気持ちいいよっ！　すごすぎいつ！」

ルチェリールタ「私もっ！　気持ちいい！」

ルチェリールタ、ニユンリンに突かれて何度も喘ぐ。

ルチェリールタ「太くてっ！　すごいつ！

もっ！と激しくっ！」

ニユンリン「あ、イク！　出るっ！」

ルチェリールタ「来てえっ！」

ニユンリン「好き！　好きいつ！　あっ！

出ちやうっ！」

ニユンリン、ルチェリールタの膣内に

射精する。

2人、体を震わせる。

ルチェリールタ「あ、ぎもぢ……」

ニユンリン「ね、まだまだしょ！」

ルチェリールタ「うんっ」

それから、長時間にわたって行為に及ぶ2人。

○村・住宅街

T「歌の国カルナコマリ」

人間がいる街中。一行、歩いている。

ニユンリン、ルチェリールタにくつついている。

芽里「ここは歌の国、カルナコマリです」

チビイ「よかったぜ、途中けっこう足止めくらってたけど、ゲドン族には襲われてないみたいだな」

芽里「ええ。ですが……魔族の数が少ない気がします」

芽里、不思議そうな顔をする。

男 A 「もしかして、騎士団長様と王女様たち
ですか？」

男が声をかけてくる。

ルチェリールタ 「はい」

男 A 「もしこの国にとどまるのであれば、注
意してください」

ルチェリールタ 「それはどういう意味ですか
？」

男 A 「この国の住民を殺戮している、通称『
仮面の殺人鬼』と呼ばれる人物のことです」

芽里 「知らない情報ですね、詳しくお聞かせ
願えますか」

男 A 「はい。そいつが殺すのは、決まって魔
族だそうです。そしてそいつらは集団で行
動しています」

芽里 「そうですか、気をつけましょう」

○村の宿・個室

一行、荷物を置く。

芽里 「なにやらきな臭いですね。情報屋ヒュ

ーとゲドン族首領も警戒しなければいけませんし」

ルチェリールタ「うっ」

ルチェリールタ、膝をつき口を手で覆う。

芽里「どうしましたか」

ルチェリールタ「ちよつと気分が。はあ、は

あ。どっかでやられた？」

芽里「では、ゆっくり休ん――」

芽里、はつとした表情になる。

芽里「……」

芽里、表情を元に戻す。

ルチェリールタ「芽里さん？」

芽里「……ルチェリールタさん。あなたはしばらく戦闘、ていうか激しい運動は禁止です」

ルチェリールタ「えっ？」

シャーニユーニダ「いう通りにしておけ。体調不良で戦闘して、もし……死んでしまつたらどうする。命は大事にしろ」

芽里「とにかく絶対安静です」

○同（朝）

T「1週間後」

ルチェリールタ「ぜんっぜん治らないんだけど……だるい」

芽里「どうしますか、今日王様に会いに行きますが、ここで待っていますか？　ですが、1人にして仮面の殺人鬼に狙われてはともよくありません」

ルチェリールタ「あ、王様に会いに行くの、ついていきますよ」

ファイル「俺たちがついてるのがいいだろうな」

○コマリ城前

一行、門の前に立っている。

芽里「身分証です。王族に用がありますので、通してください」

門番A「これはこれは。どうぞ。エンリコ様

が中でお待ちです」

○コマリ城・王座の間

エンリコ、ナキサン（35）、ナギス

デイーと話をしている一行。

ルチェリールタN「今までと同じように王様たちと話をして、エンリコ王子様を仲間にした。これで王の子は全員揃い、5つ目のマナライトをゲットした」

○コマリ王都・住宅街

エンリコ「よろしくね、僕はエンリコ。ともに、レドニクスを討ち倒そう」

ルチェリールタ「はい。よろしく願いします」

2人、握手する。

エンリコ「なんだ」

芽里「病院に行きましょう。そこでわかるはずです」

○コマリ王都病院・院長の部屋

ルチェリールタ、椅子に座って院長と
向かい合っている。

院長「病気ではありません。これは――」

○同・待合室

ルチェリールタ、待合室に戻ってくる。

ニユンリン「どうだった？」

ルチェリールタ「おめでただって」

ニユンリン「え」

ニユンリン、固まる。目に涙を浮かべる。

ニユンリン「あーしなんかが、こんな幸せで
いいの？」

ルチェリールタ「いいんだよ」

ニユンリン「ルチェリールタ……」

ニユンリン、涙を流しながらルチェリ
ールタに抱きつく。

シャーニューニダ「だが、これからどうすが
っ」

シャーザベスラ、シャーニューニダを

肘で突く。

シャーザベスラ「しっ！」

シャーニューニダ「すまん」

シャーニューニダ、乱れた服を整える。

ニユンリン「ねえルチェリールタ」

ルチェリールタ「なに？」

ニユンリン「結婚しよう。あーし、ルチェリ

ールタの優しさで、この人しかいないって

思っただけ」

ルチェリールタ「……嬉しい。わたしもそう

だよ。わたしでなければ、お願いします……

……！」

ルチェリールタ、にこっと笑う。

爆音が響き渡る。

芽里「外です！ 仮面の殺人鬼集団でしょう
か？」

芽里、窓のほうを向く。

○コマリ王都・病院前

仮面をつけた集団が、少ない魔族の民衆を殺戮している。

芽里「もう現れましたか」

フードやマントで身を包み、首に機械をつけている仮面の殺人鬼、一行の方を向く。

仮面の殺人鬼「……やっと見つけたぞ、弟の仇。やはり、やつという通りだった」

仮面の殺人鬼、一行に向かって手をかざす。

エネルギー弾が、シャーニューニダの目前に迫る。

シャーニューニダ「はあっ！」

シャーニューニダ、エネルギー弾を弾く。

仮面の殺人鬼「あのと看以来だな、騎士。まさか魔族といるとは。英雄になる器ではなかったか」

ルチェリールタ「え？」

芽里「人間態にもかかわらず魔族を見抜いた。

おそらくこの人が仮面の殺人鬼、やりますね。そして、仮面は全員人間と見ました」

芽里、剣を構える。

仮面の殺人鬼、少し離れた距離からルチェリールタに剣を向ける。

仮面の集団たち、

ルチェリールタ「お前、さっきなんて言った……？ 誰だか知らないけど、ニュンリンをばかにしないで」

ルチェリールタ、しずかな怒りの表情になる。

ニュンリン「下がってルチェリールタ。お腹の中の子を大事にして」

ルチェリールタ「うん」

シャーザベスラ「ここは僕の出番だね……ロ
ンリーテンタクル」

タコが仮面の集団をとらえていく。

仮面の殺人鬼、よける。

シャーザベスラ「よけたか。強いな」

2つの勢力の戦闘が開始される。

芽里「凶悪な魔族だったら殲滅できましたが、

相手は人間。あくまで捕らえることを意識

してください。散らばって鎮圧します」

シャーニューニダ「ニュンリン、お前ルチェ

リールタを守れよ」

ニュンリン「シャーニューニダ……うん！」

ニュンリン、うなずく。

一行、散らばる。

ニュンリンとシャーザベスラ、ルチェ

リールタを守るように立ちふさがる。

チビイとワウー、ぷるぷるしている。

仮面の集団が、ルチェリールタたちに

向かって攻撃を放つ。

シャーザベスラ「はあっ！」

ニュンリン「ルチェリールタに触るな！」

分厚い水の膜と糸が攻撃を防ぐ。

シャーザベスラ「この子には、いろいろ苦労

をかけた。だからそのぶん幸せになっても

らわなきやいけないんでね……皇女として、

かっこつけさせてもらおうかな」

チビィ「かつこいいなお前」

シャーザベスラ「そうだろ？」

シャーザベスラ、ニツと笑う。

○同・住宅街

芽里、フィル、心愛、シャーニューニ
ダ、ヨナが、各場所で仮面の集団を制
圧している。

○同・病院前

仮面の殺人鬼「ちいっ！」

仮面の殺人鬼のマントが、ロンリーシ
ヤークの攻撃で破られる。

髪は束ねられている。

ルチェリールタM「ん？　今、何か既視感が」

ふっくらとした胸が見える。

チビィ「こいつ女か」

仮面の殺人鬼「なぜだ。なぜどこに行っても

人間は魔族に与している」

シャーザベスラ「人魔共栄論を知らないのか

い？」

仮面の殺人鬼「なんだそれは」

ルチェリールタ「え、マジで知らない？」

ルチェリールタ、驚いたような表情になる。

仮面の殺人鬼「俺の弟は魔族に殺された。俺は夕杜の技術を借り、この時代に姿を表した。邪悪な存在に対抗するための聖なる騎士と協力するためにな」

ルチェリールタ「あ？何を言っている？」

チビィ「お前、怒ってるのか？」

ルチェリールタ「当然。わたしのニュンリンを侮辱した」

ルチェリールタ、仮面の殺人鬼を睨む

仮面の殺人鬼「だが、皇帝の体たらくを目にして失望した」

ニュンリン「何言ってるのかわからないよ。

イエヌダスラが書いた人魔共栄論を読んだら？」

仮面の殺人鬼「なんだと」

仮面の殺人鬼、ピクリと動く。

仮面の殺人鬼「この体たらくを作ったのが、

弟だと言いたいのか！ 弟を侮辱するな！」

シャーザベスラ「え？ じゃあ、お前は」

仮面の殺人鬼「そうだ。英雄イエヌダスラの

弟、イエフリスト……それが俺の名だ」

少しの間。

ルチェリールタ「御託はいい。消えろ」

シャーザベスラ「お、おい！」

ルチェリールタの属性魔法が、仮面の

殺人鬼に向かっていく。

爆音が響き渡り、煙があたりを覆う。

シャーザベスラ「君は安静にって言われただ

ろ……まったく」

煙が晴れる。

仮面の殺人鬼が、姿を表す。

仮面が崩れ去る。中から姿を表すクレ

ーディー。

ルチェリールタ「クレ……ディー？」

ルチェリールタ、呆然とする。